

宮崎駿・宮崎吾朗との比較から読み解く

アーシュラ・K・ル＝グウィンの『夜の言葉』

要旨

氏名：太田有智

著名なファンタジー・SF作家のアーシュラ・K・ル＝グウィンの創作論をテーマにしている。彼女の創作論は自身の評論集『夜の言葉』の中で語られ、曰くファンタジーとは「詩と同様夜の言葉を語るもの」である。この評論集で語られる創作論や評論は、抽象的に語られていて、本質を掴みづらい。この論文ではそれを自らの言葉で言語化することを目指している。

〈ゲド戦記〉の原作者であるル＝グウィンは、スタジオジブリのアニメ映画監督である宮崎駿の作品を評価していた。しかし、同じくスタジオジブリの映画「ゲド戦記」は批判されることになり、その監督を担ったのは駿の息子である宮崎吾朗であった。

なぜ、ル＝グウィンは宮崎駿を評価し、宮崎吾朗を批判したのか。共通点の多い両者の作品を比べることで、ル＝グウィンの創作論がより明確になるのではないかと考え、上記を問いとして設定した。

三者の作品を比べる際には、共通のモチーフを取り扱った作品を比較対象とするため、駿の作品は「千と千尋の神隠し」を選んだ。

本論の第1章はル＝グウィンの〈ゲド戦記〉と宮崎吾朗の映画「ゲド戦記」の比較であり、第2章はル＝グウィンの〈ゲド戦記〉と宮崎駿の「千と千尋の神隠し」の比較である。それぞれの作品に共通するモチーフである、“名前・魔法”、“竜”、“影”の3つを軸として、それぞれの描かれ方を比較し、その背後に

ある共通点や相違点を述べていった。それを受けて第3章では、モチーフにおける共通点や相違点が生まれる原因を探るために、それぞれの創作法に焦点を当てていった。

第3章で、ル＝グウィンの創作法に言及してく中で、「夜の言葉」とは、元型的な経験からイメージを形成し、それを喚起させる物語であると結論づけた。その物語では、「倫理的真剣さ」ゆえに物語世界の内的規則が遵守される。そのためリアリティに満ちるが、現実には起こり得ないことを描いているため、現実以上に「より深い概念」を形成する。この「より深い概念」を喚起させることが、「夜の言葉」を語ることである。

そして、問いに対する結論は、ル＝グウィンが駿を評価し吾朗を批判した評価の分かれ目は、上記のような、「夜の言葉」的な物語創作をしているか否かであるとした。